

ゴフマン理論に見る「構造」

－ 「構造」と「主体」の関係性 －

高橋 裕子*

ゴフマン自身は「構造」と「主体」を主題に論じたことはないが、ゴフマン理論を紐解いて見ると、そこには「構造」と「主体」のせめぎあいの中で生成される相互行為が浮かび上がってくる。ゴフマンが想定した「構造」とは、単なる観念ではなく、相互行為過程で具現化され認識され解釈されるルールである。そして「主体」とは、誇り高く自己提示しつつもその背後で有利なポジション取りを計る行為者である。儀礼論や行為論や会話分析などの分析視角の変化に応じて、「構造」が後景と化す一方で「主体」が前面に押し出され、かくしてそこで紡ぎだされる相互行為の様態もまた変化していった。しかしこれらに通底する議論は、見過ごされがちな行為者の微細な振る舞いに着目し、いかなる振る舞いをもって「構造」が相互行為に持ち込まれるのかを示すことにあった。本稿における目的は、第一に今まで正面を切って語られることの少なかったゴフマン理論の根底に潜む「構造」を掘り上げること。第二に「構造」がアプリアリに存在するにせよ、ただそれを受動的に受け止めるのではなく、それを資源に相互行為を操作する行為者としての「主体」を掘り上げることである。なお本稿における考察は、ゴフマンのジェンダー分析を素材にしたい。

キ・ワ-ド：「構造」と「主体」、ジェンダー、directional signal、footing、重層的な振る舞い

目次

はじめに

第1章 「主体」の立ち現われ

－ 3つのアイデンティティ概念より －

第2章 ジェンダーの「構造」

第3章 パースペクティブの転換

－ 儀礼論から行為論へ －

第4章 Spoken Interactionに見る「構造」

おわりに

はじめに

ゴフマンがミクロな社会的状況という分析単

位を用いたことは衆知であるが、彼の研究がミクロな分析のみに終始していたかといえばそうではない。A. ギデンズが「ゴフマンの研究は彼自身が考える以上にマクロ構造の理解に貢献する」と指摘するように、彼は「マクロ構造」といえるかはともかくとして、対面的な領域を越えた「構造」を分析射程に納めていたのである¹⁾。例えば、ゴフマンが*Gender Advertisements*において析出した「男＝上位者、女＝下位者」とする分類図式である。男と女を二項対立的に捉える分類図式は、特定の対面的な領域を越えてひとつの観念として共有されている。しかし同時にこの観念は、意識的で

* 立命館大学大学院社会学研究科博士後期課程

あれ無意識的であれ、相互行為過程で具体的な「男(女)らしさ」を伴って提示されるのである。ゴフマンにあって、分類図式は自律的に存在するのではなく、具体的な表出をもって永らえる何物かであった。行為者をジェンダーのラインに沿って分かつ分類図式を「構造」 - とりわけジェンダーの「構造」 - と見做すならば、「諸個人が他者の現前にある時に偶然発生する出来事は、構造的な取り決めの聖画像・要約・生態学的メタファーとして機能するように企図されている」のである²⁾。ゴフマンが想定していた「構造」は年齢、人種、社会的階層などだが、少なくとも彼のジェンダー分析は、明らかにジェンダーの「構造」を取り扱っていたのである。

とはいえ、C. レヴィ = ストロースの構造主義を「言葉上の奇術verbal sleights of hand」を思い起こさせると酷評したゴフマンにとって、「構造」は相互行為の基底として重要であったに過ぎない³⁾。レヴィ = ストロースは、象徴作用の内的法則を見極めようとし、象徴作用を結晶に見立てて「結晶というのは、いちばん美しい、またいちばん簡単な特性であり、その研究は構造の理解のために、いわば近道となるものだ」と語るが、「構造」に内在的な象徴体系を研究するこの手法からゴフマンは明らかに一線を画していたのである⁴⁾。ゴフマンは、社会的状況で「構造」がどのように立ち現われ相互行為を規定していくのかという観点から「構造」を照射しており、いかなる意味においても「構造」が社会的状況に直裁的に持ち込まれるとは考えない。「構造」を基底にしつつ行為者のリアリティがいかに生成されるのかという問題こそが、ゴフマンにとって考察されるべき課題だったのである。かくしてゴフマンは、「構

造」をアプリアリに措定しつつもそれを相対化して捉えたのである。

ゴフマンの立場は、主体的意味や感情や動機や意向を、相互行為の唯一の規定要因と見做すデンジンやケラーとは異なる。このことはゴフマンが「主体」の意味を無視したことを示すものではなく、そもそも彼にとって行為者とは、状況定義を斟酌しつつ、自らの意向を押し通すこともあれば、あきらめたり妥協することもある存在だったのである⁵⁾。しかも行為者は決して戦略を放棄しない。行為者は時として、他者に取り入ったり、他者を欺いたり、ごまかしたりもする。このようにゴフマンにあって「主体」の有り様は単一で平板ではなかったのである。かくしてゴフマンはデンジンとケラーの批評に答えて、「もし私のアプローチの結果が『主体』の脱中心化と解釈されるのなら、このことは『主体』への関心の欠如を意味するものではなく、単に追加的な角度から『主体』の立ち現われfiguringにアプローチする試みを意味するものだ」と弁明しつつ、私は喜んで『主体』の脱中心化の陣頭に立ちたい」と主張したのである⁶⁾。ゴフマンのいう「主体」の立ち現われとは、「主体」の動機や意向などを過大に評価し、それらを相互行為の唯一の規定要因と見做す相互行為論に対するアンチテーゼだったのである。

かようにゴフマンの議論には、「構造」と「主体」とが表となり裏となってひとつの縄を縄うように存在するにもかかわらず、彼は「構造」や「主体」を主題として取り上げず、従ってまたそれらがどのような関係性のもとに成立するかについて何も語らなかった。C. ウェストが述べたように、ゴフマンが自らの研究を既存の研究との関連で語ることを極力控えたため

に、「彼の遺した業績を跡付けることは、明確な意志を欠いたままでは困難」なのである⁷⁾。しかしながら、私はゴフマンのジェンダー分析を手掛かりに、「構造」と「主体」を析出し解釈することで、彼のアプローチが両者の狭間で揺れ動く行為者のリアリティに肉迫するものであったことを明らかにしようと思う。確かに、儀礼論から行為論へと分析視角を転換させていくに従って、ゴフマンの「構造」概念は後景と化し「主体」概念のみが前景に押し出されているかのごとき印象を与える。またこの傾向は、*Frame Analysis*以降の会話分析において、さらに顕著となる。だからといって、ゴフマンが「構造」を消し去ったわけではない。ゴフマンの議論に潜む「構造」概念の変遷を跡付けていくことで、分析視角の違いがあるにせよ、むしろゴフマンが執拗に「構造」と「主体」の関係性の中で生成される相互行為を取り上げていたことが判明するであろう。

このような確認作業を経て、最終的に私はゴフマンのジェンダー分析が、男と女をカテゴリー化して捉えがちなジェンダー・スタディーズ - 構造分析の範疇にあるジェンダー・スタディーズ - を脱構造的な分析へと導く道標を示唆していたと主張したい。構造分析は、市井にある行為者が「構造」に単に呪縛されるのではなく、実際にはそれを資源に戦略を企てるにもかかわらず、「主体」を等閑視してしまったが故に、行為者がどのようなプロセスを経て「構造」を抑圧と感じたり喜ばしく感じるのかを解明できなかったのである。ウェストが指摘するように、ジェンダー・スタディーズにおけるゴフマンの評価は決して高くはない⁸⁾。しかし、彼が提起した脱構造的な分析手法は、少なくとも「構造」と「主体」の両者を分析対象に

据える第三の道を提示していたのである。相互行為のただ中であって、いかに「構造」が立ち現われ、「主体」が立ち現われるのか、行為者はいかに「構造」に囚われまたそれを回避しようとするのか、ゴフマンは手を変え品を変え著作の端々で、ある時は婉曲にそしてある時は執拗に言及してきたのである。これをどう掘り上げ読み解くかが、本稿における私の試みであり、そうするにあたって私は「構造」と「主体」を分析的に弁別する手法を採用しようと思う。従って本稿を通じて「構造」を考察することが主題ならば、そこでの通奏底音は、「主体」及びいずれもが自律的に存在しえない「構造」と「主体」の関係性の考察である。

第1章 「主体」の立ち現われ

- 3つのアイデンティティ概念より -

アイデンティティという言葉をもって、私たちは暗黙裡に首尾一貫した「主体」を想定しがちであるが、ゴフマンはこのような「主体」概念に疑問を投げかけた。というのも、行為者は異なった社会的状況で状況定義に応じて振る舞わざるをえず、必然的に分裂的な「主体」として立ち現われざるをえないからである。ゴフマンのいう「主体」の立ち現われとはいかなるものなのか、彼が『スティグマの社会学』で指定した3つのアイデンティティ概念をもとに考察してみたい。

3つのアイデンティティ概念とは、①自我アイデンティティ ego identity、②社会的アイデンティティ social identity - その下位概念として、バーチャルな社会的アイデンティティ virtual social identityとアクチュアルな社会的アイデンティティ actual social identity -、

③個人的アイデンティティ personal identityである。行為者とはこれら3つのアイデンティティの錯綜した関係性の中で分裂した「主体」として立ち現われざるをえない諸個人であると、ゴフマンの目には映っていた。少なくとも社会的状況を照射するなら、そのいずれもが首尾一貫した「主体」を保証してくれるものではない。

自我アイデンティティは、社会的状況の連続性の中で得るに至った「主体的subjective・内省的reflexive」アイデンティティである⁹⁾。つまり、「個人が多様な社会的経験を経た結果、獲得するに至った自己の状況、自己の持続性、キャラクターなどについての主体的感覚」で、ゴフマンは「自我アイデンティティという概念を用いるとき、われわれは個人がスティグマ、およびその処理について何を感じているか考察することができるようになる」という¹⁰⁾。ゴフマンが挙げた顔に醜い傷痕(穴)がある少女は、「常人the normal」として扱われることを切に願いつつも、他者が自分を「常人」として扱ってくれる用意がないことを様々な経験から知っている。「この頃、ほかの女の子と同じようにボーイ・フレンドをもち、土曜日の夜にはデートをしたいと思うようになりましたが、誰も私を連れて行ってくれません。…私の顔の、真中には大きな穴があり、みんなが怖がります。私だって怖いぐらいです。ですから男の子が私を連れて行きたいと思わなくても仕方がないと考えています」という¹¹⁾。過去に自分と対面した他者は、まなざしを凍てつかせ、会話がぎこちなくなり、余りにも居心地の悪さに耐え切れず幾度となくそそくさと逃げ去っていった。運良く友好的に接してくれる他者がいたとしても、平等な条件で付き合ってくれる気はな

かったに違いない¹²⁾。事実誰も自分をまともなデートの相手とは見做してくれないのだから。このような苦渋に満ちた社会的経験を経て、ゴフマンが取り上げた少女は、「常人ならざる者」とする自我アイデンティティを獲得する。自我アイデンティティとは、「主観的、内省的」アイデンティティだが、しかしゴフマンにとってそれは心理的領域に内閉したアイデンティティではない。何故なら自我アイデンティティは必ず社会的状況に回帰するのであるから。例えば「スティグマの処理」である。

自らを「常人ならざる者」と認識した行為者にはいかなる自己提示が可能なのか、という問題である。あるいは、「常人」と「常人ならざる者」を両極にする価値基準の中間、すなわちグレーゾーンに位置する行為者にはいかなる自己提示が可能なのか、という問題である。ゴフマンは、「常人」と「常人ならざる者」を両極に置く価値基準を一方で見据え、そのような価値基準を知悉し、スティグマの暴露を恐れるが余り、必然的に「スティグマを処理」せざるをえない行為者を他方で見据えていたのである。

ゴフマンは次のように語る。「スティグマのある人は自らのスティグマを、それが明瞭で、目立つ程度に応じて層別化する傾向を示す」と¹³⁾。「スティグマのある人は、アイデンティティの基準に従うことができないにもかかわらず、その基準を自分自身にあてはめる」と¹⁴⁾。しかもゴフマンによると、スティグマを負う者も「深いところでは、他者と何ら変わらない『常人』であると感じており、従って公平な機会と幸運に恵まれるに値する人間だ」と感じ取るのである¹⁵⁾。このようなアンビパレントな感情は、「萎縮と虚勢との間を、一方から他方へとすばやく変わり揺れ動く」ような不安定さと

なって露呈する¹⁶⁾。「常人ならざる者」としての自我アイデンティティを抱いてしまった行為者のアンビバレントな感情は、社会的状況における自己表出の矛盾となって現われ、ひるがえってそれは「常人ならざる者」としての自己認識を強化していくことになる。このようにゴフマンにあって、自我アイデンティティは常に社会的状況との関連でのみ語られていたのである。

「スティグマという用語は...属性ではなくて関係を表現する言葉なのである」と述べるように、ゴフマンはスティグマが相互行為過程で生成されることを鋭く見抜いていた¹⁷⁾。この相互行為を直接担うアイデンティティが、社会的アイデンティティである。つまり、相互行為はその下位概念としてのバーチャルな社会的アイデンティティとアクチュアルな社会的アイデンティティの交換過程によって成り立つ。提示することを求められているのはいかなるアイデンティティで、いかなるアイデンティティが実際に提示され、それはいかに受け止められるか、である。ゴフマンは、行為者が他者に対して抱く「標準的期待」をバーチャルな社会的アイデンティティと名付け、これに対して「求められれば提示できるカテゴリー、属性」をアクチュアルな社会的アイデンティティと名付けた¹⁸⁾。どのような役割を担い、どのような社会的階層に属する人物なのか、どのような経済的階層に属し、男なのか女なのか、年齢は幾つぐらいで、どのような性向を持つ人物なのか、自らの「カテゴリー、属性」に見合う自己提示をせよというわけである。このような無言の圧力に応じて、行為者は何らかの自己提示を迫られる。というよりは、むしろ行為者の振る舞いの一挙手一投足が自己提示として受け止められ、それ

は行為者を判断する材料となるのである。「外観やジェスチャーなど他者の喚起をうながす身体的な記号」は、不可避免的に拾い上げられ解釈される¹⁹⁾。そしてゴフマンは、「アクチュアルな社会的アイデンティティとバーチャルな社会的アイデンティティとの乖離」こそがまさにスティグマを生み出すと考えていたのである²⁰⁾。だとすると、いかなる行為者も「標準的期待」から逸脱したアクチュアルな社会的アイデンティティを提示することで、スティグマを負う可能性があるということになる。「最も幸福な『常人』でも、半ば隠れた欠点を持ちがちであり、しかもその小さな欠点が波紋を広げ、アクチュアルな社会的アイデンティティとバーチャルな社会的アイデンティティの苦々しい乖離となって露呈するような社会的場面がある。すなわち、たまに不安定な人と、常に不安定な人とはひとつの連続体の上にある」のである²¹⁾。つまりゴフマンがいうように、「常人」と「常人ならざる者」とは、行為者がより頻繁にどちらの属性を演じているのかその頻度を規定しているに過ぎない²²⁾。

「標準的期待」は、しぐさ、態度、顔の表情、服装、声の大きさやトーンなど詳細かつ多岐に渡っており、それは状況定義を斟酌して具体的に提示されねばならない。「標準的期待」は相互行為に先立って存在し、行為者はモニターリングされていることを意識するやいなや、それに則って自らの振る舞いを調整せざるをえない。行為者のこのような振る舞いを通じてのみ、状況定義は誰の目にも明らかになる。

「状況定義は表出されねばならず、またその表出は無数の潜在的攪乱のただなかで維持されねばならない」のである²³⁾。かくして行為者は、自らの意向に反して「～せざるをえない」状況

にしばしば直面することになる。故にゴフマンは、社会的状況に立ち現われる行為者を、首尾一貫した「主体」ではなく、分離せざるをえない者と見做したのである。

最後に個人的アイデンティティである。このアイデンティティは、物理的にひとつの身体しか持ち合わせないことに起因する行為者の、性別、生年月日、生誕地、本籍地、居住地、婚姻関係、家族構成、学歴、職歴など、公的な記録に記すことができる生活史のことである。個人的アイデンティティが誰にどの程度知れ渡っているのかによって、行為者の自己提示は自ずと異なったものとなる。そして行為者は個人的アイデンティティの開示を様々な理由から回避する。公の場所など匿名性が支配する空間では、個人的なアイデンティティを開示しないのがむしろ普通だし、非日常的な空間を楽しむ場合、個人的なアイデンティティを明らかにしないことで自由を享受したいと感じるであろう。あるいは単に良い印象を与えるために、かもしれない。いずれにせよ、情報操作passingがいかに身近であるかは、公的な記録を一元的に掌握し管理しようとする「国民総背番号制」に対して私たちが感じる抵抗からも明らかである。何らかの情報操作がなくては行為者は居心地悪く感じるし、またそれは相互行為を円滑に進めるためにも必要なのである。そうであるにせよ、性別、年齢、人種、社会的階層といった属性は、身体技法を伴って社会的状況に持ち込まれるのであるが。

平英美はゴフマン理論に「主観主義」に対する批判が読み取れるという²⁴⁾。ゴフマンの「主観主義」に対する批判は、3つのアイデンティティ概念から如実に読んで取れる。というのも、ゴフマンのアイデンティティ概念は全て、

分裂した「主体」を分析する為の伏線だったのであるから。それらのいずれもが独立して成立しえず、何らかの形で社会的状況と係ることによって成立するのである。ゴフマンのアイデンティティ概念から浮かび上がるのは、「個人が自らが信じていないショーを他者の現前で維持する程度に応じて、個人は主体からのある種の疎外を経験するようになる」と彼が語る自己疎外した「主体」だったのである²⁵⁾。首尾一貫した「主体」といった観念が、神話としてあまねく流布されていようと、その神話が「主体」を祭り上げようと、そこに密やかに込められる行為者の矜持とはせいぜい「私は物事の成り行きに逆らわないで、それについていく。しかし、同時に、あなたが完全に私を押え込んでいるのではないことだけは、あなたに知っておいただきたい」といった程度のもの、少なくともゴフマンはそうのように感じ取っていたようである²⁶⁾。一連の議論から見て取れるのは、首尾一貫した「主体」といった観念に対するゴフマンのシニカルなまなざしなのではないだろうか。

第2章 ジェンダーの「構造」

G・ゴノスによれば、「ゴフマンの意図は不断の活動の背後にあるものを見ること、つまり...それを不可視的に統治している構造を見ることにある」という²⁷⁾。ゴノスは、見過ごされがちな、ゴフマン理論の根底に潜む「構造」を鋭く指摘した。本章では、男と女の二項対立的な分類図式を「不断の活動の背後にある」ジェンダーの「構造」と捉え、考察を深めたい。

*Gender Advertisements*で「男 = 上位者、女 = 下位者」とする分類図式を析出したゴフマン

は、それが単なる信念である以上に社会的状況で具現化されることに着目した。例えば「両性間の愛情豊かな身振りは、男と女とを、保護する者 - 保護される者、抱く者 - 抱かれる者、慰める者 - 慰められる者、支援する者 - 支援される者、愛情を差し出す者 - 愛情を受け取る者」へと振り分けるのである²⁸⁾。この身振りが、日常生活の具体的な場面と食い違っているか否かは、ここではさほど重要ではない。何故ならウェストがいうように、ジェンダーの「構造」は定型化された男と女の振る舞いを認識し解釈するルールを差し示しているに過ぎないのだから²⁹⁾。つまりジェンダーの「構造」は、アブリアリに存在し、定型化した男と女の振る舞いを行為者がどのように認識し解釈すべきかを規定するのである。「共通の身体的表現様式body idiomを理解し合えることが、諸個人の集合体を社会と呼ぶ理由のひとつ」と述べたのはゴフマン自身であるが、実際同一の社会に属する行為者は、定型化した男と女の愛情表現をジェンダーの「構造」に基づいて正しく認識し解釈することができる³⁰⁾。ジェンダー分析においてゴフマンは、ゴノスが指摘した「構造」を示唆していたのである。

しかし、平英美は、「意味構成という事態を...対面的相互作用をモデルとした状況の属性として捉えようとするのが、ゴフマンの基本的パースペクティブ」であると語り、ゴノスの理解が単なる認識の次元に留まっていたと批判した³¹⁾。平はゴフマンが「状況定義という認識的な活動を、自 - 他の相互作用の組織化というサイクルの一環を成す活動として常に位置付けていた」と述べたが、平のこの主張はゴフマン理論を正しく咀嚼したものである³²⁾。つまり、ゴフマンは定型化された振る舞いを認識し解釈す

るルールを単に取り上げたのではなく、それを「自 - 他の相互作用の組織化」という観点から取り上げたのである。ゴフマン理論を正しく理解するには、ゴフマンが「構造」のみでなく、「構造」と「主体」とを同時に分析の射程に納めていたことを見逃してはならない。そうであるにもかかわらず、私はゴノスの提案を、ゴフマンが明らかに想定していた「構造」 - ゴフマン自身は「構造」という用語を極力控えたが - に着目したものとして評価したい。

さて、ゴフマンが取り扱ったジェンダーの「構造」とは具体的にいかなるものなのだろうか。ゴフマンは広告写真には①Ritualization of Subordination = 従属の儀礼、②Licenced Withdrawal = 公認の尻込み、③Function Ranking = 職能の序列などが描写されているという。

①Ritualization of Subordination = 従属の儀礼

広告写真の中で女は男よりも低位に身を置き、背後から男に包み込まれるようなポーズ（例えば男の手が肩に置かれていたり、肩を組まれていたり、男が背後に立っていたり）を取っている。また、男が立っていれば女は座っていたり、男が座っていれば女は床に寝そべっていたり、同じように立っている時でも、身長差から視線は女の方が低位に位置している。

②Licenced Withdrawal = 公認の尻込み

女は顔を隠したり、そむけたり、口に手を当てたり、手を身体の前で絡ませたりして、社会的状況に全面的に参加せず、安心感が保たれるある種の安全圏に身を置きつつそこに部分的に参加しているのである。そして、このような公認の尻込みのポーズは、圧倒的に女若しくは子どもに振り分け

られる。

③ Function Ranking = 職能の序列

男と女が一緒に仕事をする場合、責任者及び指示を与える役割は男に振り分けられる。ただし、家事に関しては、この役割が逆転して描写されている。

ゴフマンは、象徴的に描き出されたジェンダーの「構造」を上記のように分析した。上の方に男が位置し、下の方に女が位置したり、男が主導し、女が従う広告写真を私たちはリアルなものとして受け止める。ゴフマンはその理由を、広告写真が私たちの日常的な儀礼をその資源にしているからだとして、「超儀礼化hyper-ritualization」という概念を用いて説明した³³⁾。だが興味深いことに、広告写真が逆に振り付けられていても、私たちはやはりそれをリアルなものとして受け止める。私たちは、一見して脈略のない不定型な描写に直面した時ですら、それを理解すべく勝手に別の認識・解釈のルールを探し出すのである。そして、それが私たちの手持ちの認識・解釈のルールのいずれかに当てはまる場合は、それを認識し解釈することができるのだ。このような手持ちの認識・解釈のルールのひとつが、ジェンダーの「構造」なのである。要するにジェンダーの「構造」は、多くの例外が存在する諸相を横切って理念型を構成するのだ。そしてそれは、社会的状況で具体的に誰に優先権がいくらかの理由で与えられるのかなどを決定する要因となる。実際ジェンダーの「構造」は、誰が先にドアを通り抜けるのか、誰に発言権があるのか、誰がどの席に座るのか、誰が車に先に乗り込むのかなど相互行為をどのように認識し解釈するのかを決定する要因なのである。最近では飛行機に先に乗り

込むのは子ども連れの乗客だし、応接室に先に入るのは客人だったり女だったりするが、各々の場面で優先権が誰にどのような理由で振り分けられるのかを決定したり、解釈できるのは、私たちが有する共通認識故にである。この共通認識の一角をジェンダーの「構造」が担うのだ。これがゴノスが語った「セッティングの背景にあるルール」である³⁴⁾。しかし「構造」はゴノスが述べるように、「参加者にリアルと受け止められるものは何か、どのようにしてこのリアリティに関与すべきなのかといった疑問に答えるべく潜在的な世界」を表象しているのだろうか³⁵⁾。

*Frame Analysis*におけるゴフマンの主張は「経験の組織化the organization of experience」³⁶⁾にあり、それは平が述べるように「人々が自己の活動を組織化することで同時に自・他の関係をも組織化しているという点で、二重の意味が含意されている」³⁷⁾のである。「潜在的な世界」がリアリティの生成に一役買うにせよ、「主体」がそれをいかなるものと捉え自らの活動を組織立てていくのかという観点を導入しないとしたら、「潜在的世界」があたかも平板なリアリティを展開させるかのごとき誤謬に陥ることになる。しかもゴフマンにあって、「ここで何が起きているのか」という質問は必ずしも単一の解答をもって迎えられるわけではない。「社会的リアリティを私たちに与える儀礼は、物事のあるがままの図式ではなく、奨励的な知覚の手引きに過ぎない」と、ゴフマンが「構造」を相対化させた点をゴノスは捨象してしまったようである³⁸⁾。かくしてゴノスの見解は、明らかにゴフマン理論の矮小化である。例えばジェンダーの「構造」にせよ、「経験の組織化」という観点から取り上げなければ、その

多様な現われとそれに纏わる行為者のリアリティを掘り上げることができない。換言するならば、「主体」を分析の枠組みに再浮上させなければならないのである。何故なら「いかなる場面も性差を描く機会と定義することができ、どんな場面にも性差の提示を有効に示すための資源が見出される」というゴフマンの含意は、まさに「主体」にあったのであるから³⁹⁾。「主体」の意向や能力を考察の対象に据えないとしたら、皮肉やほのめかしや揶揄や冗談など行為者の戦略と係った振る舞いは扱えないのではないだろうか。例えば、ゴフマンの最後の博士課程院生であったC. ガードナーはサンタフェにおける参与観察で次のような場面を観察した。

女が2匹の猫をかごに入れて歩いていた時、女は通りすがりの男達が大きな声で「見栄えのするpussy(小猫, 女, 膣を意味する言葉)を見たな」と語っているのを聞いた⁴⁰⁾。

上記の性的ほのめかしdouble entendreは、言い咎められた際に、「猫のことをいったのであって、君のことをいったのではない」という言い訳を常に行為者に用意する。無礼を表立ってなじる道が予め封じられていることを承知した上で、いやそうであるからこそ、行為者は性的ほのめかしに嘲りや冷やかしを自在に込めることができるのだ。いうまでもなく、これは行為者の戦略なのである。行為者が日常的に抱くリアリティとは、このような行為者の戦略をも含めた多様な振る舞いを捉えることなくして決して考察することができないものであるに違いない。

第3章 パースペクティブの転換

－ 儀礼論から行為論へ －

「男 = something, 女 = something」と男と女をカテゴライズして捉える手法は全てある意味で、構造分析の範疇にある。そして分析がその範疇に留まる限り、それは行為者が抱く「somethingであるかもしれないが、そうではないかもしれない」といったリアリティから乖離せざるをえない。ミクロなレベルで相互行為を観察すると、行為者とは「構造」に規定されつつも、しばしば「構造」からはみだしたり、「構造」を相対化させたりする、「構造」に納まりきれない存在である。さらに行為者は「構造」を操作することで戦略を企てる。ゴフマンは、一方で「構造」を掘り上げ、他方で「構造」に寄り添ったり「構造」を揺るがせたりする多様な重層的な行為者の振る舞いに分析のメスを入れた。ゴフマン理論を儀礼論と行為論とに腑分けし、彼がいかに自らの分析枠組みの中で「構造」を相対化させていったのかを論じたい。

ゴフマンの儀礼論の特徴は、対面的相互行為状況を分析の俎上に載せたところにある。ゴフマンは相互行為における行為者のフロントをシンボリックに「顔」という言葉で言い表し、「顔」が社会的な意味を有していると述べた⁴¹⁾。「ひとたび「顔」によって表現された自己イメージを持つや、それに準じて生きることが期待され」、また「自らに相応しくない行為を放棄することを誓い、高く付いても他の行為を行なうように自らに強いて、self-respectを示すことが要求される」⁴²⁾。従って、「自己とは儀式的なもの a ceremonial thingであり、適切な儀礼的配慮でもって取り扱われ、適切な光

の中で他者に提示されなければならぬ聖なるものa sacred objectなのである」⁴³⁾。行為者に付与されたself-respectに価値を置き、それを高くと謳いあげる社会にあって、行為者の「顔」は冒涇することが許されない聖なるもの、つまり儀礼の対象なのである。そして儀礼を通じて行為者は、出会いの場の参加者となる。

諸社会はどこにおいても、そのメンバーを社会的出会いにおける自己規制的参加者として動員せねばならず、諸個人を動員する一つの方法が儀礼を通してなのである。諸個人は、知覚鋭くあれ、自己に付着された諸感情と「顔」によって表現される一つの自己を持って、誇りと名誉と威厳を持って、思い遣り深くあれ、如才なく振る舞い装いを凝らせ、と教えられるのだ⁴⁴⁾。

ところで、「構造」は社会的な分類体系を端的に差し指すが、儀礼論においてそれはどこに位置するのだろうか。もしゴフマンがいうように、「顔」が「承認された社会的属性という観点から描き出された自己イメージ」ならば、「構造」は「顔」に凝縮されることになる⁴⁵⁾。例えば、ジェンダーの「構造」は、「男(女)らしさ」の徴を帯びた「顔」として儀礼的に表出される。しかしゴフマンは、儀礼はいかなる意味においても「構造」の単なる現われではないという⁴⁶⁾。つまり、社会的状況で「構造」は直裁的に描写されるのではなく、社会的状況にはその時空固有の「構造」の現われ方があるとゴフマンは考えていた。ここでゴフマンが注目するのは、社会的状況を包み込む「膜(membrane)」の作用である⁴⁷⁾。「膜」は社会的状況に無関連な事柄を排除し、関連ある事柄を

選択的に導入する。この「膜」の作用を経て状況定義は鮮明に浮かび上がり、行為者はいかなる状況定義に従うべきなのかをはっきりと認識できるようになるのだ。だから例えばジェンダーの「構造」が牢固たる基盤をもって存在していようと、それがどのような意味合いで社会的状況に持ち込まれるのかは、各々の場面で自ずと異なったものとなる。かくしてゴフマンは、「役割と出来事が局所的に具現化される世界は、参加者を...外部に基礎を置く多くの事柄から切り離してしまうが、しかし、相互行為の世界に...外部的な事柄がわずかながら入り込むことを容認する」と述べたのである⁴⁸⁾。つまり「どんな相互行為にも、次のような二重の主題が存在する。その場より大きな世界が持ち込まれなければならない。しかしそれはまた偽装された方法で行なわなければならない」のである⁴⁹⁾。故にゴフマンは「相互行為で状況定義を互いに維持する過程は、関連及び無関連のルールを通じて社会的に生成されるのだ。...私たちがリアリティをしっかりと実感することができるのは、外部の世界の揺るぎない特徴によるのではなく、まさにもういルールによっているのである」と語ったのである⁵⁰⁾。

儀礼論においてゴフマンは、自己の聖性を巡る攻防が展開される可能性を指摘する。つまり、①喧嘩によって憤然と席を立つことで「顔」を保つことができるのであれば、行為者は相互行為を犠牲にしてもそうする可能性がある、②「顔」へのこだわりが他者に標的を与え、公然・非公然に顔を破壊する試みがなされる可能性がある、③「顔」が立たなくなる恐怖が、行為者を社会的出会いの危機よりも孤立の安全を選ばせる可能性がある、のである⁵¹⁾。儀礼が行為者間の絆を形成するにせよ、時として

それを犠牲にするような形で、行為者に付与された聖性を保護すべく攻防が繰り広げられる可能性があるのだ。顔 がどのような意味合いでどの程度「構造」を象徴しているのかは別にして、行為者は一義的にこの 顔 を誇り高く守り抜かなければならないのである。

儀礼論でゴフマンが描写した 顔 を巡る攻防はある意味でいかにも単調な戦略である。彼が行為者の多彩な戦略を成功裡に分析したのは行為論においてであり、そこで「構造」は相対化されることになる。

ゴフマンは動物界には、単純化され、誇張され、ステレオタイプ化された効果的なシグナルが存在するとし、これが「自らの状況、特に自らの意向を容易に読解可能な表現で伝える」とする⁵²⁾。このようなシグナルが動物生態学でいうディスプレイだが、これをゴフマンは「交際のためのmodeやstyleやformula」を打ち建てる行為者の路線設定alignmentと捉え直した⁵³⁾。要するに、ディスプレイがある程度儀礼的体裁を取るにせよ、動物生態学的な意味合いでそれが相互行為の効果的な反応を引き出す点に着目したのである。そして彼は儀礼概念をディスプレイ概念へと置き換えることで、行為者の能力をもって産出される多様な振る舞いを分析の射程に納めたのである。

「人間は他の動物と異なって自らが行なうディスプレイに対して非常に意識的であることが可能である。人間は自らが選んだ文脈の中で計画的にディスプレイをパフォームすることができる」と述べ、行為論においてゴフマンは行為者の能力を強調する⁵⁴⁾。行為者は、実質的な行為を妨げることなく相互行為の端々にディスプレイを差し挟む能力を有しているとゴフマンは捉えた⁵⁵⁾。例えば行為者は、頼りなげに首を

かしげたり、視線を少し下に向けて恥じらいを見せるといったディスプレイをいかなる文脈においてであれ差し挟むことができ、しかも意識的にそうすることができる。とはいえ、ゴフマンは「発散give off」という言葉を用いてディスプレイが非意図的である可能性をも示唆しており、行為者の能力を狭義に捉えない。ゴフマンは述べる。「男と女のhuman natureを真に構成しているものは、男性性と女性性を描写したり解釈することを学ぶ能力であり、...彼らも持っているこの能力は男と女であることではなく、人間であることに依拠している」と⁵⁶⁾。この主張を吟味すると、非意図的に発散されたものであれ、定型性を帯びたディスプレイを提示したり解読する能力は、社会化を経て獲得された「人間としての能力」なのである。

行為者の能力と関連して重要な点は、行為者が様々なレベルで多様に「構造」を相互行為に持ち込むことである。ゴフマンは「特定のあり方でフレーム付けられたいかなる活動の最中であれ、いかなる関心も注意も払われるべきではないと見做されるもうひとつの活動の流れが存在する」と語り、両者があいまって相互行為の意味を生成していく様を指摘する⁵⁷⁾。より詳細にゴフマンは、「2つの活動の流れに行行為者が参加する中で、活動の内容からそれ自体は排除されるが、活動を規制したり境界付けたり明瞭にしたりする...手段として機能する一連のサインが存在する」と述べ、このサインをディスプレイと区別してdirectional signalと名付けた⁵⁸⁾。ゴフマンの記述を字義通りに解釈すると、directional signalはstory lineをより明瞭にするものとして立ち現われる。状況定義を側面から補完するサインである。だがそうであるとは限らない。状況定義に反して提示される

directional signalは、story lineにとってむしろ雑音なのである。そこで状況定義は二重性を帯びたり、あいまいなものとなり、「何だかすっきりとしない妙な印象」を与えるのだ。

確かに、ディスプレイが行為者間で合意された路線設定となるという解釈は単純でわかりやすい。だが明らかに、日常的な相互行為はより複雑な様相を呈する。例えば行為者は、story lineとは関係ないにせよ、しばしばdirectional signalを通じてジェンダーの「構造」を頻繁に意識せざるをえなくなる。directional signalを通じて、「男(女)らしさ」が過剰に漂ったり、過剰に漂わせていると判断されることは日常的な出来事ですらある。ジェンダーの「構造」が外在的に存在するが故に、行為者は社会的状況にそれを公式にであれ非公式にであれ社会的状況に持ち込むことができるのだ。ゴフマンという「男(女)らしさ」を描写したり解釈したりする「人間の能力」は、このような多様で重層的な振る舞いが生起する蓋然性を当然想定していたのである。つまりゴフマンは、directional signalを取り上げることで、多様で重層的な振る舞いとそれに伴う様々な戦略をも示唆していたのである。もちろん自らの路線設定をどこに求めていくのかは、行為者にとっては重要な戦略の拠点であるが、行為者は路線設定が合意に達しない場合でもdirectional signalを通じた戦略を企てることができる。少なくとも「私は現在の路線設定に心底承服しているわけではない」といったdirectional signalを発することは常に可能である。

行為者は、ただ受動的にジェンダーの「構造」に包摂されるのではない。そうではなく、むしろ行為者は多様で重層的な振る舞いの端々でジェンダーの「構造」を操作する過程に自ら

の戦略を埋め込んでいくのである。ゴフマンは「人間の能力」に分析のまなざしを注ぐことで、行為者が主体的に「構造」を操作することを示し、行為者のリアリティを成功裡に掘り上げたのである。しかしながら、私たちのリアリティがそうであるように、ゴフマンもまた「人間の能力」をもって行為者がジェンダーの「構造」から自由になれるとは考えていなかったのである。

支配と従属の表現は、社会的ヒエラルキーの単なる複写やシンボルあるいは儀礼的肯定以上のものである。これらの表現が相当程度ヒエラルキーを構成しているのである⁵⁹⁾。

第4章 Spoken Interactionに見る「構造」

ゴフマンにとって、spoken interactionはそれが生起する社会的状況全体を見据えてこそ正しく分析できるものだが、そうでありながらもそこにはspoken interactionに固有の「構造」と「主体」が示されていた⁶⁰⁾。「構造」がどのような経緯を経て、spoken interactionに持ち込まれるのか、そこでの「主体」とはいかなるものかを考察したい。

footingはゴフマンの会話分析において重要な概念であるが、彼はこれを社会言語学者であるガンパーツ達に取り上げたcode-switchinglike behaviorにヒントを得て、自らのものにした⁶¹⁾。ガンパーツ達がcode-switchinglike behaviorとして例示したのは、教師が学生に与えていた指示であった。教師の指示内容の変化は全て、身体の向きや声のトーンの変化をもって伝達されていたが、ガンパーツ達はこのような変化をcode-switchinglike behaviorと名付けたのであ

る。それに対してゴフマンは、これをspoken interactionにおける行為者の路線設定及び微妙なトーンの変化をfootingと名付けた。ゴフマン自身はfooting概念を路線設定を含意するものとして用いるが、私は行為論における議論との混乱を避けるため、それを相互行為の微妙なトーンの変化に特定して用いることにする。というのも、路線設定の内側で発生する微妙なトーンの変化までも同じ用語で言い表すことは、混乱を招くように思われるからである。そして何よりもゴフマンの会話分析の特徴は、spoken interactionにおける微妙なトーンを分析の俎上に載せていたことにあるからである。

spoken interactionにおける行為者は、話題の一貫性にさほどこだわらずfootingを自在に変化させる。ある発話に対して必ずしも直接応じる必要はなく、「べつに」とか「まあ」と曖昧に答えることも、「またまた冗談を」ととぼけることも、独り言めかして「いやになっちゃう」とつぶやくことも可能である。また「ところで」とか「それはいいとして」と話題を転換することも可能である。あるいは、ちょっと押し黙ったり、声色を変え感情の変化を伝達することも可能である。spoken interactionがこのような自由を行為者に許容するにもかかわらず、なお行為者は「構造」に呪縛されがちである。行為者がどのような過程を経てgender politicsに陥るかを、ガードナーが取り上げたストリート評言street remarkをもとに検討したい。ストリート評言とは「公的な場所で、ある個人が見知らぬ他者に行なう自由で評価的なコメント」であるが、このような評価的コメントに最初に注目したのはゴフマン自身であった⁶²⁾。

不当に開示させようとする人物と開示せざる

をえなくなる人物との関係に関するコメントを付け加えておきたい。コミュニケーションラインを破ったり、コミュニケーションに関する紳士協定を破るトラブルメーカーは、しばしば自らの権利を犠牲にするという代償を払う。彼らは、本来彼らに与えられている敬意を犠牲にした人物、つまり聖性を失った人物とみなされるようになる。一端この犠牲を払うや、個人は既に汚染されているが故に...、他者が接近してはならない理由はほとんど見当たらないのである⁶³⁾。

このように述べた後、ゴフマンはストリート評言に関して「西洋社会の一部では、通りすがりの女の魅力を称えるために、男が見知らぬ女に口笛を吹いたり、その他の表示的な方法で挨拶する習慣がある。それをどう受け取るかは、彼女次第である。彼女はいかなるコミュニケーションも発生していないかのごとく振る舞うこともできる。また彼女は振り向いて友好的なあるいは敵意に満ちたコメントをもって応じることもできる」と続けた⁶⁴⁾。行為者に付与された聖性に関する示唆に満ちた考察を展開しているが、ゴフマンはストリート評言における「開示させようとする者」と「開示せざるをえなくなる者」の問題を深く追究しなかった。故にガードナーは、ゴフマンの分析がストリート評言における女の経験の暗部を照射していないと批判したのである。「承認された参加者ではない女は、発話をあたかも聞かなかったかのごとく振る舞うように義務付けられている」にもかかわらず、行為者が互いに視聴覚の届く範囲にあり、ストリート評言を無視するにせよそれに応じるにせよ、女は一義的にアンビバレントな状況に追い込まれる⁶⁵⁾。ここには、女がアンビ

バレントな状況に追い込まれることを知りながらいかに対処するのか、興味深げに、あるいは冷ややかに、あるいは一抹の期待やからかいをもって女の出方を待つ男の姿が見え隠れする。しかも女がこのストリート評言に応じる構えを見せるやいなや、それは「構わないでもらえる権利the right to be left alone」を放棄したものと見做され処遇されるのである⁶⁶⁾。だからガードナーは、「女が『ありがとう』と応じると男は時として増々助長していくようである」と述べた⁶⁷⁾。女が称賛として受け取った後、ストリート評言は野卑で品位を汚すようないやがらせへと転じられたり、あるいは軽蔑的な笑いを引き起こすことがあるにもかかわらず、ゴフマンがそのような状況に陥った女の当惑を等閑視したとガードナーは考えたのである。

加えて彼女は参与観察から、ストリート評言には性的ニュアンスが含まれがちなことを突き止め、「性的に積極的だと見做される場合、社会的生活において女を性的装置で判断する可能性は常に存在するのだ」と指摘した⁶⁸⁾。実際、公の場所においては特定の役割から解放されており、女は外観で判断されがちである。「性的に積極的だ」と見做されればなおのこと、性的装置ばかりが妙に誇張されることになる。性的に魅力的であるのかないのか、その性的魅力が他者の関心を引くのか引かないのか、称賛に値するのか値しないのか、下卑た印象を与えるのか与えないのかといった評価的なコメントは、二項対立的な関係下にある男と女の間ではありがちなことである。だから実際のムーブは男によって引き起こされたにもかかわらず、女の外観が最初のムーブを引き起こしたと示唆したゴフマンの解釈は、ある意味で正しいのである。

「必要な素材を精神に運んでくるもの」をゴフマンはlocatorと呼んだが、ストリート評言の発端となるlocatorは、女の身体とりわけ性的装置なのである⁶⁹⁾。望もうが望むまいが、「女らしい」外観をもって女が存在する以上、女の身体はストリート評言のlocatorとして作動する。女の身体の中の部分がどのようなタイミングでlocatorとなりストリート評言を引き起こすのかは、その時々男の「ひらめき」や気分が掛かっており、潜在的な主導権は男の側にある。いやそれ以前に、女の身体はみつめられ評価されるものだとする、男と女のまなざしの不均衡が散在するのだ。だとすると、ストリート評言は次のようなプロセスを経ることになる。男が女を一瞥する、女の身体がlocatorとして作動し男のストリート評言を引き出す、女は無視することも含めた何らかの対応を迫られることになり、男は女の出方を待つ。男と女の振る舞いは、ことごとく非対称的に振り分けられるが、そのきっかけは女の身体にある。そうであるならば、女の身体がそのものが、ジェンダーの「構造」を社会的状況に持ち込むきっかけとなるlocatorだったといえはしまいか。

ゴフマンはストリート評言を「軽微な違反」という⁷⁰⁾。しかしこのことは、逆にいえば、女は「軽微な違反」に度々苛まされるということでもある。女がこれを時として苛立たしく感じる理由は、女の身体がlocatorとして作動し、ジェンダーの「構造」が男の恣意的な判断で社会的状況に持ち込まれることにある。そして何よりも、ジェンダーの「構造」を資源に展開される非対称的な振る舞いには、安川一がいう「カテゴリーの力学」が貫徹しているのである。

女というカテゴリーにいただけで、男にはな

い形での不自由な選択を強要される。しかも
共在から全面撤退する以外には避けようがない。
問題はカテゴリ間の力学である⁷¹⁾。

spoken interactionがfootingの変化させる自由
を行為者に許容するとはいえ、行為者はジェ
ンダーの「構造」から免れえない。いかなる
footingを用いようとも、女がストリート評者の
餌食になったことに変わりはない。何故なら女
がストリート評言を受けた時点で、既に基本的
な路線設定は決定されてしまっているのだから。
footingをどのように用いようとも、いわば
ストリート評言の出会いの内側で微妙なニュー
アンスを変化させたに過ぎないのである。かく
してゴフマンは“Footing”の最終部分で、「私
たちは既に設定された路線設定が間もなく再び
採用されることを理解し、一時的にそれを保留
しつつもそれにピリオドを打ちはしない」と、
既に設定された路線設定が引き続き効力を失っ
ていないことを示したのである⁷²⁾。

ゴフマンがfootingを相互行為の単なる微妙な
トーンの変化としてのみ捉えていたかといえ
ば、既に示したようにそうではない。むしろゴ
フマンは、footing概念を広義に捉え、それが微
妙なトーンの変化を示すこともあれば、その後
の状況定義を転換することもあると考えてい
た。私自身は用語の混乱を避ける為に、footing
を敢えて微妙なトーンの変化のみを差し示すの
に用いたが、ゴフマンの議論において、路線設
定は様々なレベルにおいて重層的に存在するの
である。各々路線設定がどの程度状況定義を規
定するのかといった違いはあるにせよ、それら
が多様に組み込まれ相互行為の流れを縛ってい
くとゴフマンは見做していた。そうであるが故
に、「ひとつの路線設定の中にもうひとつの路

線設定を完全に封じ込めることができる」と、
あたかも基底的な路線設定と従属的な路線設定
とが入れ子のように存在しつつ状況定義を規定
するかのごとくゴフマンは記述したのである⁷³⁾。
このようなゴフマンの議論を踏まえて、ジェン
ダーの「構造」を概観するなら、それが様々な
レベルで相互行為に持ち込まれるであろうこと
は容易に想像がつく。レベルの異なった様々な
路線設定にジェンダーの「構造」が滲み出し、
それらがあいまってひとつの相互行為を形成し
ていくのである。

spoken interactionの考察を通じて再び、ジェ
ンダーの「構造」が相互行為を規定していくこ
とを確認してきた。しかし行為者にとって、
footingの自由が意味することは決して小さくない。
ゴフマンが述べたように、「いかなる抗議
であれ、それ自体が自己暴露のひとつの形態 a
form of self-exposureになるというジレンマに
女が直面する」以上、ストリート評者の餌食に
なってしまった女は、直接的な怒りの一撃を放
つことを極力控えざるをえない⁷⁴⁾。また女は、
そうすることで相互行為がバイオレンスを伴う
ような対決の場面へ転じられることを内心恐れ
てもいる。このような八方ふさがりの状況にあ
りながらも女は、footingを用いて一矢を報いる
ことができるのだ。わざと作ったエレガントな
微笑みをさっと侮蔑のまなざしに変える。歩を
緩め、肩をすくめて「馬鹿な奴」といったしぐ
さを第三者に見せる。「取るに足らない奴」と
そっぽを向く。footingを自在に用いることで、
女は溜飲を下すと同時に自らのself-respectを
守るのである。footingがいかに頼りなげに見え
ようが、footingなくして有効な戦略を企てるこ
とは難しい。何故ならゴフマンが述べたよう
に、抗議する女の外観の乱れそれ自体がモラル

の弛緩と判断されるのであるから。

ジェンダーの「構造」は、間違いなく男と女の振る舞いを非対称的に振り分ける。そしてまさにその点にこそgender politicsが胚胎するというのが、参与観察を経たガードナーの見解であった。しかし、ゴフマンもまた - ガードナーの批判にもかかわらず - 明らかにgender politicsを取り上げていたのである。「両性間の愛情豊かな振り付け」においてさえ、「政治的に問題が残る」とゴフマンが看破していたことを見逃してはならない⁷⁵⁾。また、「親切な配慮を差し伸べる者は誰でも、...パワーの厳しい面を見せる自由を有している」とも彼は語っていたのである⁷⁶⁾。

おわりに

神話的な思考の本性は、複雑雑多な要素からなり、たくさんあるとはいってもやはり限度のある材料を用いて自分の考えを表現することである。何をする場合であっても、神話的思考はこの材料を使わなければならない。手もとには他に何も無いのだから。したがって神話的思考とは、いわば一種の知的な器用仕事 = プリコラージュである⁷⁷⁾。

以上は、レヴィ = ストロースの『野生の思考』からの抜粋だが、彼は例えば神話の中の「限度ある材料」、つまり「本来何か他のものに帰することができないもの」のシステムティックな関係性を分析することを構造主義的アプローチと称した⁷⁸⁾。「器用人 = プリコルールとは、くろうとはちがって、ありあわせの道具材料を用いて自分の手でものを作る人のことをいう」と記した後、レヴィ = ストロースは

「器用人は多種多様の仕事をやることができる。...限られた道具や材料の集合で何とかするというのがゲームのルールである」と述べた⁷⁹⁾。レヴィ = ストロースは、言語や神話や親族体系には等しく構造が存在すると捉えていた⁸⁰⁾。ゴフマンが掘り上げた行為者もまた「構造」という限られた資源を元手に多様な相互行為を編み上げていく。従ってゴフマン理論の基底を成す「構造」は、レヴィ = ストロース流の構造を思い起こさせる。しかしゴフマンにとって「構造」は、それが相互行為過程でどのような意味を持つのかという点で重要であったに過ぎない。彼の関心はあくまでも、「主体」のいかなる振る舞いをもって「構造」が相互行為に持ち込まれるのかという点にあったのだ。かくしてレヴィ = ストロースが「主体」を消し去ったとすれば、対するゴフマンは「主体」を浮上させたのである。このような分析視角の違いこそが、レヴィ = ストロースの構造分析を「言葉上の奇術」とゴフマンに語らしめた所以である。

行為者のナマの感情はナマの経験から導き出される。行為者が対面的領域に身を置き、微細な振る舞いをもって自己提示していく過程において、である。儀礼論においてゴフマンは、行為者が 顔 と象徴的に語られるself-respectを自己提示に託す様を取り扱った。そこで行為者は、いつ何時貶められるかわからないself-respectを賭金として差し出すようなナマの感覚に身を委ねる。例えば「男(女)らしさ」の自己提示である。行為者は、ジェンダーの「構造」をもとに、自らの振る舞いを整え「男(女)らしさ」の自己提示を行なう。そこには行為者のself-respectが込められており、「男(女)らしさ」が称賛されれば喜ばしく感じる

にせよ、それが無視されたり侮辱されると悶え苦しまねばならない。ゴフマンが「裸の感覚 naked sense」と表現したように、振る舞いの細部に行為者のself-respectが宿っており、行為者は五感を通じてヒリヒリとするような喜怒哀楽を経験するのである。self-respectがかように脆弱であるということは、行為者の戦略がself-respectの攻防に収斂されることを意味する。儀礼論においてゴフマンは、「構造」と「主体」との関係性を、行為者が「構造」を微細な振る舞いの端々で表象し、それをいかにself-respectを賭して守り抜くのか、という観点から取り上げたのである。その結果、行為者の戦略は、self-respectの攻防に限定されていた。ここでゴフマンが描き出した行為者のリアリティとは、self-respectと厳密に係ったものであった。

行為論と会話分析においてゴフマンは、より多様で重層的な相互行為を分析の対象に据えた。ゴフマンは、「構造」を資源に多様で重層的な相互行為を織り成す行為者と、その背後にある戦略を前面に押し出したのである。ここに立ち現われる行為者は、一元的に「構造」に呪縛されるのではなく、むしろ「構造」を資源に果敢に戦略を企てる存在である。行為者は、等しくジェンダーの「構造」を資源にしつつも、ディスプレイやdirectional signalやfootingを用いることで、それを際立てたり、あいまいにしたり、無視したりとその強調の度合いを様々に変化させる。しかもジェンダーの「構造」が相互行為過程で錯綜して立ち現われることはよくあることだ。ジェンダーの「構造」が無視されているかと思えば、どこからともなく滲み出てきたり、ジェンダーの「構造」が強調されているかと思えば、そのニュアンスが転じられた

りするのである。ゴフマンは、行為者をこのような多様で重層的な相互行為に付き従う存在としてのみ見做したのではなく、それを背後から操作する存在と看做していた。行為論と会話分析においてゴフマンは、「構造」と「主体」との関係性を、行為者がどのような感情や意図をもって相互行為のどのレベルに「構造」を持ち込むのかという観点から取り上げたのである。「主体」の能力に着目することで、日常生活で行為者が抱くリアリティを、ゴフマンは詳細に描き出したのである。

ところで私たちは、ジェンダーの「構造」を戦略に用いる限り、行為者がそれに呪縛されるとゴフマンが見做していたことに留意しなければならない。女は分類図式を資源に戦略を企てると、「女＝下位者」とするポジションに客観的に陥ってしまう。「女＝下位者」が、必ずしも「損」を意味しないし、女の悲しみや苦しみを意味しないにせよ、少なくとも「女＝下位者」とするポジションは窮屈で不自由である。もし、「女＝下位者」とするポジションが愛情豊かな関係をもって報われるならば、それは女にとって喜ばしいことかもしれない。そうであるにせよ、「自立」が喧伝される現代社会において、従属的なポジションに甘んじることは、女に増々抑圧と感じ取られるであろう。「不利益を被っているカテゴリーの中で、子どもを除いて女のみが理想化されている」とゴフマンは述べるが、もはや女は「理想化」の先に待ち構えているかもしれない罠に無自覚ではない⁸¹⁾。

ところで女には、ジェンダーの「構造」を拒否し、従属的なポジションを脱する機会はないのだろうか。もちろん、ある。「主体」は、意を決して自らの命運を運命性に賭けることができる。「各々の出会いで、彼らは自らの安寧と

名声を危険に晒し、出会いを対決に変える」ことができる⁸²⁾。このような賭けをゴフマンはアクションと呼び、次のように述べる。「アクションという言葉をもって、私は自らの名誉のために行なう、不確かで重大な活動を意味する」と⁸³⁾。「女=下位者」とするポジションが桎梏以外の何ものであるもなくなった時、そのポジションに留まることにもはや矜持が保てなくなった時、女は名誉を賭けて戦いに挑むことができるのだ。もはやこのような状況を、私は甘受しない、と。

アクションがどのような帰結を招こうとも、それによってself-respectが守られることの意味は決して小さくない。self-respectを持たない行為者は、まさにその理由において、他者からの敬意を勝ち取ることができないのであるから。故に、それがいかに勝算のない愚かな挑戦であろうとも、自らの命運を賭けてself-respectを守ろうとする試みは、それ自体で称賛に値するのである。仮に誰に称賛されなくても、あるいはアクションに打って出たことに臍を噛もうとも、少なくともアクションはself-respectを死守するであろう。そして行為者のこの試みは、「危険の直面しつつ、危険が伴うアクションを推し進める能力」の証左として受け止められる⁸⁴⁾。この能力は勇氣、果敢さ、威厳、落ち着きといった道徳的見地から評価されるのである。

アクションは時として儀礼によって束ねられた行為者間の紐帯を断ち切る。だが、アクションを行なう行為者が、決してルールを無視していないことを見逃してはならない。アクションを行なう行為者は、ルールに則ってムーブの一手一手を組み立てていくその過程に自らの運命を託すのである。そして運命性に自らの将来を

託す試みの本質は祝祭である。アクションが、運命性をもって行為者のその後のあり方まで規定していくことに鑑みれば、それが例え逸脱的な色彩を帯びようとも、それは新たな未来への突破口となるのかもしれない。このアクションの有り様をどのように理論化していくのか、それを次なる課題としたい。

註

- 1) Anthony Giddens "Goffman as a Systematic Social Theorist," Paul Drew and Anthony Wootton (eds.) *Erving Goffman: Exploring the Interaction Order*, Polity Press, 1988, p.277.
- 2) Erving Goffman, "The Interaction Order: American Sociology Association, 1982 Presidential Address," *American Sociological Review* 48 (1), 1983b, p.11, 椎野雄雄訳「E.ゴフマンの『相互行為』を読むその二」『人文学報』第241号, 1993年3月, 128頁.
- 3) Erving Goffman, "A Reply to Denzin and Keller," *Contemporary Sociology* 10 (1), 1981b, p.62. 「二項対立的な観念を...レヴィ=ストロースやその他の研究者のように採用したり拡張することは、ヘーゲルの弁証法あるいは言葉上の奇術verbal sleights of handを思い起こさせ、それは私がなじんできたナマの経験主義crude empiricismと相容れない」とゴフマンは述べた。ここでいう「ナマの経験主義」とは、しばしばゴフマンが強調する対象をあるがままに分析するとする主張、すなわち「自然主義的な研究naturalistic study」を差し示す。ところで、ゴフマンは、"A Reply to Denzin and Keller"を記した以外、他者の著書や論文に対する直接的な批評の一切を避けており、このことが彼の著作を読みとくことの困難さの一因である。かくして、石黒毅も次のように述べる。「"A Reply to Denzin and Keller"を寄せるまで、一切の解説・評論・批判に対して全くの沈黙を守ってきたこと、また自著中で自身の立場を積極的に表明することも、他の立場に評論を加えることも

- なかった」と。(石黒毅「儀礼と秩序—初期のゴフマン社会学における表出の機能論的微視分析」『現代社会学』11(1), 1985年, 31頁.)
- 4) Claude Lévi-Strauss, エスプリ誌主筆 J. M. ドムナック編 伊東守男・谷亀利一訳『構造主義とは何か』サイマル出版会, 1968年, 21頁.
- 5) Erving Goffman, op.cit., 1981b, p.65. 「私の関心は、主体、意味、意図といった人間主義的に聖化された事柄 humanistically-sacred thing の特質について何が語りえるのかを考察することにあった」。ゴフマンが批難の対象に据えたデンジンとケラーのオリジナルな論文は次の通りである。Norman K. Denzin and Charles M. Keller, "Frame Analysis Reconsidered," *Contemporary Sociology* 10 (1), 1981. 「ジェームズ、シュッツ、ミード、クーリー、ウェーバーから、私たちは主体的な意味、感情の状態、動機、意向、当面の目標が、現在進行中の相互行為の構造における基礎 basic to the organization of ongoing social interaction であると想定する。...適切な社会科学は、主体性や意味や意図から構築される」とデンジンとケラーが記述したことに対して、ゴフマンは痛烈に反論を加えたのである (Denzin and Keller, p.53).
- 6) Ibid., p.65.
- 7) Candace West, "Goffman in Feminist Perspective," *Sociological Perspectives* 39 (3), 1996, p.355, 高橋裕子訳「フェミニスト視角におけるゴフマン」『立命館産業社会論集』第34巻第2号, 1998年, 143頁.
- 8) Ibid., p.142. ウェストは、ゴフマン理論がフェミニストの主要な文献に引用されていない理由を、彼女たちが自らの議論の淵源にあるゴフマン理論を認識していないからだと指摘した。
- 9) Erving Goffman, *Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity*, Prentice-Hall, 1963a, pp.,105-106, 石黒毅訳『スティグマの社会学 - 烙印を押されたアイデンティティ』セリカ書房, 1970年, 174頁.
- 10) Ibid., pp.105-106, (邦訳) 173-174頁.
- 11) Ibid., Introduction, (邦訳) 序文.
- 12) Ibid., p.7, (邦訳) 18頁. ゴフマンはスティグマのある人々を、他の人は実際には受け容れていないし、また平等な条件で交渉するつもりもないのだという。
- 13) Ibid., p.107, (邦訳) 175頁.
- 14) Ibid., p.106, (邦訳) 175頁.
- 15) Ibid., p.7, (邦訳) 18頁.
- 16) Ibid., p.18, (邦訳) 35頁.
- 17) Ibid., p.3, (邦訳) 12頁.
- 18) Ibid., p.2, (邦訳) 11頁.
- 19) Erving Goffman, *Behavior in Public Places: Notes on the Social Organization of Gatherings*, The Free Press, 1963b, p.33, 丸木敬祐・本名信行訳『集まりの構造 - 新しい日常行動論を求めて』誠信書房, 1980年, 38頁.
- 20) Erving Goffman, op.cit., 1963a, p.19, (邦訳) 38頁.
- 21) Ibid., p.127, (邦訳) 208-209頁.
- 22) Ibid., p.138, (邦訳) 226頁.
- 23) Erving Goffman, *The Presentation of Self in Everyday Life*, Doubleday, 1959, p.254, 石黒毅訳『行為と演技 - 日常生活における自己呈示』誠信書房, 1974年, 300-301頁.
- 24) 平英美「E.ゴフマンの“frame”概念について」『大阪教育大学紀要 第Ⅱ部門 社会科学・生活科学』第32巻1号, 1983年, 5頁.
- 25) Erving Goffman, op.cit., 1959, p.236, (邦訳) 278頁.
- 26) Erving Goffman, *Encounters: Two Studies in the Sociology of Interaction*, Bobbs-Merrill, 1961, p.133, 佐藤毅・折橋徹彦訳『出会い - 相互行為の社会学』誠信書房, 1994年, 147頁.
- 27) George G. G. Gonos, "'Situation' versus 'Frame': The 'Interactionist' and the 'Structuralist' Analyses of Everyday Life," *American Sociological Review* 42 (December), 1977, p.857.
- 28) Erving Goffman, *Gender Advertisements*, Harper & Row, 1979, p.9.
- 29) Candace West, op.cit., 1996, p.360, (邦訳) 149頁. 「男がもし適切な身振りで彼らが女に注目し

- ていることを伝えないとしたら、あるいは、女のメッセージの流れを妨害するのを回避するために割り込みを自制しないとしたら、あるいは男が話題移行を滑らかに行なうというルールに必ずしも従わないとしたら、それらはゴフマンの誤謬を意味するのだろうか。否、反対である。…分析対象そのものは、ルールがどのように見做され解釈されるかを差し示しているに過ぎない」。
- 30) Erving Goffman, op.cit., 1963b, p. 6 .
- 31) 平英美 前掲論文, 5 頁。私はゴノスがゴフマン理論の「構造」と「主体」との関係性の中でも「構造」のみを取り上げたと考えるが、平はまた別の角度からゴノスがゴフマン理論の一項のみを取り上げたと考えていた。平は、次のように述べる。「人格・役割図式の一項のみをゴフマンの個人概念の実質と看做して速断している点」でゴノスは間違っていると(7頁)。
- 32) 同上 7 頁。
- 33) Erving Goffman, op.cit., 1979, p.3 .
- 34) Geroge Gonos, op.cit., 1977, p.858 .
- 35) Ibid., p.860 .
- 36) Erving Goffman, *Frame Analysis: An Essay on the Organization of Experience*, Northeastern University Press, 1974, p.13 .
- 37) 平英美 前掲論文, 7 頁。
- 38) Erving Goffman, op.cit., 1979, p.3 .
- 39) Erving Goffman, op.cit., 1979, p.9 .
- 40) Carol Brooks Gardner, "Analyzing Gender in Public Places: Rethinking Goffman's Vision of Everyday Life," *The American Sociologist*, 1989, Spring, p.50 .
- 41) Erving Goffman, *Interaction Ritual: Essays on Face-to-Face Behavior*, Doubleday Anchor, 1967, p.10, 広瀬英彦・安江孝司訳『儀礼としての相互行為 - 対面行動の社会学』法政大学出版局, 1986年, 6 頁。「社会的な顔」は、最も個人的な所有物であり、彼の安全と快楽の中心であろうとも、それは社会から彼に貸し出されたものであるに過ぎない」。
- 42) Ibid., p. 9, (邦訳) 5-6 頁。
- 43) Ibid., p91, (邦訳) 88 頁。
- 44) Ibid., p.44, (邦訳) 40 頁。
- 45) Ibid., p.5, (邦訳) 1-2 頁。
- 46) Erving Goffman, op.cit., 1983b, p.11, (邦訳) 128 頁。「マイナーな儀礼は、いかなる単純な意味においても、構造的な取り決めの表出ではない。よくいって、構造的な取り決めと係って促進されたものなのである」。
- 47) Erving Goffman, op.cit., 1961, pp.79-80, (邦訳) 79 頁。ゴフマンは「いかなる出会いであれ、一義的には『膜』の機能という観点から理解されるべきである」とし、自らの研究を社会構造との関連で次のように位置付ける。「出会いの自然主義的研究 naturalistic study of encounters」は、人が考える以上に、一方では社会構造研究に近く、他方では社会構造研究から離れているのである」と。
- 48) Ibid., p.31, (邦訳) 20 頁。
- 49) Ibid., p.77, (邦訳) 76 頁。
- 50) Ibid., pp.80-81, (邦訳) 80 頁。
- 51) Erving Goffman, op.cit., 1967, p.39, (邦訳) 34 頁。
- 52) Erving Goffman, op.cit., 1979, p. 1 .
- 53) Ibid., p.1 .
- 54) Ibid., p.3 .
- 55) Ibid., p.2。「ディスプレイは、実質的な行為の最初と最後つまり接合点に集中しており、実質的行為それ自体はディスプレイによって干渉されなくてすむ」。
- 56) Ibid., p.1 .
- 57) Erving Goffman, op.cit., 1974, p.210 .
- 58) Ibid., p.210。ゴフマンは、directional signal という概念を G・ベイトソンの動物生態学的観点から引き出したという。動物生態学的観点からベイトソンは、動物間で交わされる次のようなシグナルに着目していた。①他の動物によって発せられたシグナルを認めたという意味で発せられるシグナル、②シグナルを繰り返してもらったためのシグナル、③シグナルを受け損ねたことを知らせるシグナル、④シグナルの流れを区切るシグナルなどである。
- 59) Erving Goffman, op.cit., 1979, p. 5 .
- 60) 発話はそれが生起する社会的状況を見据えて

- こそ分析できるとゴフマンは考えていた。その理由としてゴフマンは、①「おっとWhoops」や「もうOh, my god」といった一般に独り言と見做される発話が厳密には独り言ではなく、社会的状況を斟酌した発話でありがちなこと、②発話Aに対する発話Bが必ずしもAに対する受け答えになっていないこと、③「それを取って」「そこをぎゅっとねじって」といった視覚に頼った発話が成立することなどを挙げる。さらにゴフマンは、「言語が私たちに許容する研究は必然的に、言語を越えた非言語的な社会的取り決めへと私たちを導くようである。...全てのケースにおいて文化的に特殊化された解釈の規範が関与しているのである」と述べ、会話分析が文化的・社会的背景を考慮すべきだと示唆した(Erving Goffman, "Felicity's Condition," *American Journal of Sociology* 89 (1), 1983a, p.24)。
- 61) Erving Goffman, *Forms of Talk*, University of Pennsylvania Press, 1981a, pp.126-127 .
- 62) Carol Brooks Gardner, op.cit., 1989, p.48 .
- 63) Erving Goffman, op.cit., 1963b, pp.143-144, (邦訳) 151頁 .
- 64) Ibid., p.144, (邦訳) 152頁 .
- 65) Carol Brooks Gardner, op.cit., 1989, p.56 .
- 66) Candace West, op.cit., 1996, p.357, (邦訳) 145頁 . 「構わないでもらえる権利the right to be left alone」という言葉は、ゴフマンの「儀礼的無関心civil inattention」と関連付けてウェストが用いたものである。
- 67) Carol Brooks Gardner, op.cit., 1989, p.50 .
- 68) Ibid., p.50 .
- 69) Erving Goffman, op.cit., 1983a, p.11 .
- 70) Erving Goffman, op.cit., 1963b, p.145, (邦訳) 152頁 .
- 71) 安川一「 共在 というポルノグラフィ - 公共場所のジェンダー構造」安川一編『ゴフマン世界の再構成 - 共在の技法と秩序』世界思想社, 1995年, 190頁 .
- 72) Erving Goffman, op.cit., 1981a, p.155 .
- 73) Ibid., p.155 .
- 74) Erving Goffman, "The Arrangement between the Sexes," *Theory & Society* 4(3), 1977, p.328 .
- 75) Erving Goffman, op.cit., 1979, p.8 .
- 76) Ibid., p.5 .
- 77) Claude Lévi-Strauss, *La Pensée Sauvage*, Librairie Plon, 1962, p.30, 大橋保夫訳『野生の思考』みすず書房, 1976年, 22頁 .
- 78) Claude Lévi-Strauss, 前掲書, 23頁 .
- 79) Claude Lévi-Strauss, op.cit., 1962, pp.30-31, (邦訳) 22-23頁 .
- 80) レヴィ=ストロースが1977年12月に, C B C (カナダ) のラジオ放送で行った連続講話 $Math and Meaning: Five Talks for Radio$ by Claude Lévi-Strauss (University of Toronto Press, 1978), 大橋保夫訳『神話と意味』みすず書房, 1996年, 11頁 .
- 81) Erving Goffman, op.cit., 1977, pp.308-309 .
- 82) Erving Goffman, op.cit., 1967, p.182, (邦訳) 184頁 .
- 83) Ibid., p.185, (邦訳) 187頁 .
- 84) Ibid., p.218, (邦訳) 223頁 .